

---

## 研究活動報告

---

### 英国オックスフォードにおける長期研究滞在

筆者は2019年8月1日から2020年4月5日にかけて英国に滞在し、オックスフォード大学社会学部 Man-Yee Kan 准教授との共同研究に取り組んだ。Kan 准教授は European Research Council を基盤とする研究プロジェクト“GenTime”の研究代表者であり、当プロジェクトでは日本・韓国・中国・台湾などの東アジア諸国における生活時間とライフコースに関する比較研究が行われている。筆者は同プロジェクトのコラボレーターならびに社会学部の客員研究員として研究滞在した。

英国滞在中、筆者は主に以下の2つの下位プロジェクトに関与した。ひとつめは、多世代同居と出生力との関係に関する研究である。GenTime のひとつの研究課題として、東アジアにおける多世代同居システムが個人のライフコースに及ぼす影響を明らかにすることが挙げられており、GenTime のメンバーの多くが生活時間や無償労働に焦点を合わせる一方、人口学的なアウトカムに着目した研究が欠けていたため、筆者が補完する形でプロジェクトに関与した。同研究については、GenTime が2020年1月に主催した国際ワークショップ“Multigenerational households in East Asia”において成果報告した（報告題目：“Multigenerational Living Arrangements and Marital Fertility in Japan: A Counterfactual Approach”）。

第2に、東アジア諸国の生活時間調査データの標準化である。米国およびヨーロッパ諸国においては The Multinational Time Use Study (MTUS) という国際比較可能な生活時間調査データが存在する一方、東アジアにはそうした国際比較可能な生活時間調査データの基盤が存在してこなかった。そこで、GenTime プロジェクトは東アジア諸国の生活時間調査を標準化 (harmonization) し、MTUS と比較可能な形式に加工している。筆者は日本の「社会生活基本調査」(総務省)の標準化にたずさわった。また、こうした東アジア諸国の標準化された調査データを用いて、GenTime プロジェクトメンバーならびに筆者の共同研究として生活時間のジェンダー差の長期的トレンドに関する分析を進め、その成果を2020年4月のアメリカ人口学会(オンライン開催セッション)にて報告した(報告題目：“Gender Convergence? Trends in the Gender Division of Paid Work and Unpaid Domestic Work in Five East Asian Societies”）。

オックスフォード大学は言うまでもなく各分野において世界最高峰の大学のひとつであり、特にヨーロッパ各国から毎日のように研究者がセミナーやワークショップでの報告に訪れている。社会学部は毎週月曜日に大学院生向けのセミナーが開催されており、筆者も“Fertility Projection and Remarriage in Japan”という題目で報告の機会を得た。また、同セミナーにおいて、ストックホルム大学の人口研究ユニット (Stockholm University Demography Unit) の代表を務める Gunnar Andersson 教授による、北欧諸国の出生動向に関する報告を聞くことができたのは大きな収穫であった。

また、オックスフォード社会学部には Melinda Mills 教授を代表者とする、ゲノム人口学の研究センターが発足されたばかりであり、2020年2月から3月に研究プロジェクトメンバーらが社会学部のビルに移ってきたところであった。そのような中、新型コロナウイルスの感染拡大がオックスフォードでも始まった結果、外出制限が発令され、オックスフォード大学のほとんどの学部・研究センターへの入構ができなくなってしまった。本来、筆者は2020年7月末まで英国に滞在する予定であったが、こうした影響もあり、2020年4月上旬に帰国を余儀なくされた。英国での研究滞在期間が短縮されて

しまったことは残念であるが、滞在中に得られた知見や人的ネットワークを当研究所での今後の研究活動に生かしていきたい。(余田翔平 記)

## 国連アジア太平洋統計研究所 (SIAP) ウェビナー

2020年8月20日(木)に、国連アジア太平洋統計研究所(SIAP、千葉県千葉市)が「新型コロナウイルス感染症死亡率測定に関する挑戦 Challenges of measuring the mortality of COVID-19 Pandemic」と題するウェビナーを開催し、米国ランド研究所のラファエル・ヴァルダバス(Rafaele VARDAVAS)教授、バーモント大学サラ・ノワク(Sarah NOWAK)准教授、SIAP李銀求(LEE Eunkoo)氏と筆者が、米国、韓国、日本における新型コロナウイルス感染症の死亡統計に関して報告を行った。

進行中の感染症の致死率や死亡率は様々な要因により影響を受け、その把握が難しいが、韓国ではこのウェビナー直前に、週別の死亡数が公表されるようになり、それをういた地域別や年齢別の超過死亡についての解説があった。新型コロナウイルス感染症も当初の想定に反して長期化しており、各国のデータに対する取り組みも変化してきているようである。(林 玲子 記)

## 日本行動計量学会第48回大会

2020年9月1日(火)～9月4日(金)に早稲田大学戸山キャンパスで開催予定であった日本行動計量学会の大会は、対面開催が中止となり、チュートリアルセミナー、シンポジウム、基調講演のみがPDF資料の配信やウェビナーで行われ、口頭発表、ポスターセッション、ラウンドテーブルについては、登壇予定者が参加費を支払い、抄録を提出した場合には、抄録集に掲載した内容を大会にて「発表したもの」とみなされることになった。筆者は、岩本健良(金沢大学・人文学類)と平森大規(ワシントン大学大学院・社会学研究科)と共同で、「調査票調査で性的指向・性自認を捉える—SOGI 設問の試験的調査に基づく考察」を発表した。本発表は「社会」という部会に入っていた。その他には、教育、数学・統計、政治・経済、心理・認知・情報、言語・文化、マーケティング、マーケティング・経営、教育・数学・統計、教育・医療といった部会が設けられていた。人間の行動に関して計量的アプローチの研究を行う、計量的方法の開発等に関心を持っているという共通点がある以外、専門も関心もさまざまである学会員の方々からの、自分たちの発表に対する反応やコメントを楽しみにしていたので、対面でなくてもオンライン報告ができなかったのは残念であった。

(釜野さおり 記)

## 第30回日本家族社会学会大会参加報告

今年でちょうど30回目を迎えた日本家族社会学会大会が、2020年9月12日(土)、13日(日)の2日間にかけて開催された。本大会は東北大学川内南キャンパスにて(仙台市)開催予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、オンラインによる大会運営となった。

自由口頭報告は33件と前回大会と比べて少なかったものの、結婚・出生・子育て・高齢期など人口問題に関わる部会が多く編成され、例年通り活発な議論がなされた。テーマセッションは、家族の多